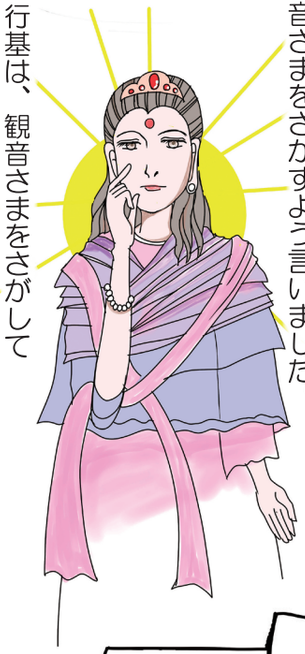
『水間寺縁起』～貝塚に伝わる民話～

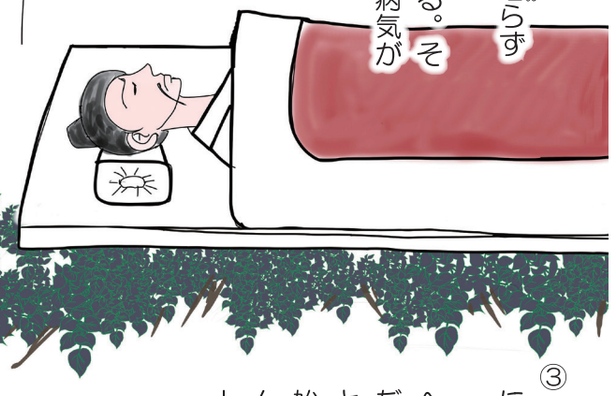
貝塚学用教材

①　今から千年以上も前、奈良時代のお話です。聖武天皇が重い病気にかかりました。なかなか治らずねていると、夢の中でおつげがありました。

「奈良から西南の方向に、観音さまがいらっしゃる。その観音さまを奈良におつれしておいのりすれば、病気が治るだろう。」

それを聞いた天皇は、行基というお坊さんに、観音さまをさがすよう言いました。

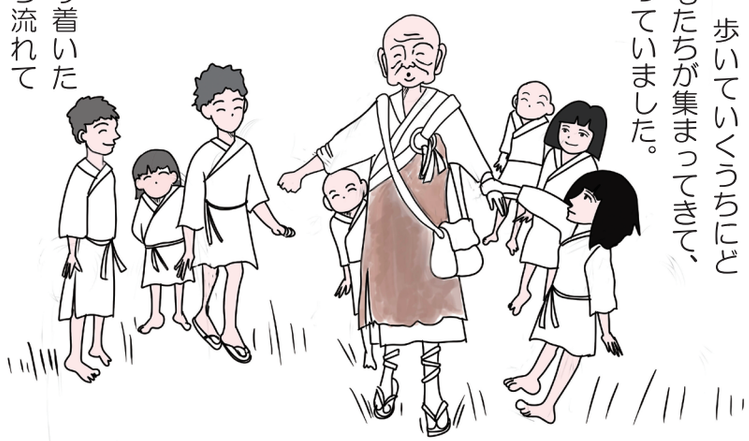




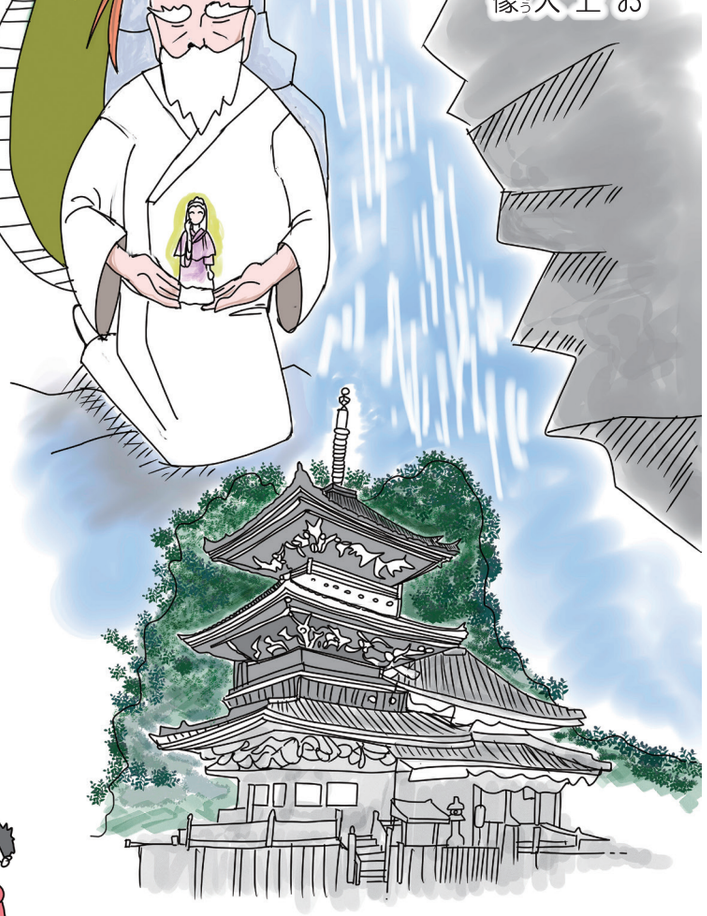
②　行基は、観音さまをさがして西南の方へ歩きはじめました。しばらくいくと、一羽の白い鳥が飛んできました。行基は、鳥のあとについて歩いていきました。貝塚の※ある村まで来たとき、鳥は、「わたしの役目はここまでです。」と言って、飛びさり、羽を落としていきました。道にまよいそうになった行基は、鳥が飛びさった方に歩いていきました。

③　しばらくいくと、※一人の子どもに出会いました。その子どもは、「観音さまがいらっしゃるところへ案内します。私について来てください。」と言って、行基の手を引いて歩き始めました。歩いていくうちにどんどん子どもたちが集まってきて、十六人になっていました。

そうしてたどり着いたのは、葛城山から流れてくる清らかな水の間に、大きな岩がある水間というところでした。



④　行基は、子どもたちに導かれて谷へおりていきました。すると、大きな岩の上に一人の老人がすわっていました。老人の手には、金色にかがやく観音さまの像がありました。老人は、「あなたが来るのを待っていました。」と言い、その像を行基にわたしました。



そして、その老人は龍に姿を変えて、天にのぼっていきました。

行基は、観音さまの像を急いで奈良に持ち帰り、おいのりをしました。すると、聖武天皇はたちまち病気が治り、元気になりました。

⑤　天皇はとてもありがたく思い、老人がいたところにお寺を建てるよう、行基に命じたと伝えられています。

こうして建てられた水間寺では、行基を水間まで導いた子どもたちに感謝し、今でも毎年お正月に、十六人でおもちをつく『千本づき』がおこなわれています。

※行基を案内した鳥が羽を落とした場所を『鳥羽（とば）』、一人の子どもと出会った場所を『清児（せちご）』、と呼ぶようになったと言われています。

発行者　貝塚市教育委員会